

〈研究ノート〉

中世盛期・後期西ヨーロッパの「市場」をめぐる諸問題

——1990年代以降の欧米学界を中心に——

山田 雅彦

0 問題の所在

中世のヨーロッパ社会に「市場」（いちば、しじょう）が遍在していたことは今や常識である。史料を繙けば随所で市場や商品・貨幣流通に関する言及に出くわす¹⁾。かのピレンヌでさえも、カロリング時代の経済を「農業的」つまりは「閉鎖経済的」と述べながら、実際に史料に現れる市場や流通の処理に一定のページを割かねばならなかった²⁾。従って問題は、市場の有無の確認ではもはやない。むしろ、遍在する市場や流通が、自給自足的な生活とならび立ちながら、当時の人々の暮らしのなかにどのように、どの程度入り込んでいたのか、あるいは統治者や市場利用者は市場とどのように向き合っていたのか、総じて市場の経済的・社会的機能を全体的に見極めることにある。

その作業に当たって、最近の欧米中世経済史学界は、新しい理論的枠組みの導入を様々に試みている。1980年代に、ポランニーにそのルーツを遡る「経済人類学」の視点³⁾が中世初期経済史の分野に応用され、特にイギリスのホッジスらによって新たな中世初期フランク時代の市場・流通論が展開した⁴⁾。しかし、中世盛期・後期の市場論においてそれ以上の影響力を持ったのは、近世・近代史の領域で一時話題になった「モラルエコノミー」論、また比較制度分析、ゲーム理論の市場観である⁵⁾。たとえば、「取引費用」〈transaction cost〉の分析は、アメリカ、イギリスの経済史家を中心に、イギリスからバルト海地域に関する中世経済史の市場研究に1990年代以降しばしば登場する。また、西地中海貿易におけるマグリブ商人の商慣行を、「懲罰的多角戦略」の概念を設定して読み解いたグライフの研究はわが国で

1) 拙稿「カロリング朝フランク帝国の市場と流通—統一王国の時代を中心に—」拙編『伝統ヨーロッパとその周辺の市場の歴史』（清文堂、2010年）15-44頁。

2) アンリ・ピレンヌ著、中村宏・佐々木克己共訳『ヨーロッパ世界の誕生—マホメットとシャルルマーニュ—』（創文社、1968年）359-366頁。

3) カール・ポランニー著、玉野井三郎他訳『経済の文明史』（ちくま学芸文庫、2004年）など。

4) R. Hodges, *Primitive and peasant markets*, Basil Blackwell, Oxford, 1988. またその5年後の1992年には、スポレート中世初期研究週間の企画として「中世初期の市場と商人—ユーロアジア圏と地中海圏—」がテーマとされ、翌年報告論文集として刊行されている。中世初期市場史に対する学際的アプローチの一端がここにも現れている。Centro italiano di studi sull'alto medioevo (ed.), *Mercati e mercanti nell'alto medioevo: l'area euroasiatica e l'area mediterranea, 23-29 aprile 1992*, Spoleto, 1993.

5) この間の経済史学における市場論の新たな理論的展開については、藤井美男『ブルゴーニュ国家とブリュッセル—財政をめぐる形成期近代国家と中世都市—』（ミネルヴァ書房、2007年）の序章を参照。

もよく知られるものとなっているが、これも商人の取引関係記録の読みと解釈にゲーム理論を応用したもので、2006年にその成果が一冊にまとめて刊行された。わが国でもすぐに訳業が開始され、翻訳を手にすることができる⁶⁾。関連して、2009年にはジェノヴァ商人のコメンダ契約を、具体的な経験の積み重ねとして読み解く経済史研究もアメリカ人研究者ヴァン・ドースラーによって出版されている。

他方、そのような経済学理論を優先するアプローチとは別に、個々の市場実態・商品流通の解明も着実に積み重ねられてきている。1991年には私自身もフランドル年市の起源について新しい見方を提示した。1993年にはシャロン・シュル・ソーヌ年市研究で名を馳せたフランスのデュボワ教授への献呈論集が出て、多数の中世商業史の成果が収録されている。特にブロックマンスは、アントウェルペン年市の起源と成長について通常よりも早い時期からその歴史をスタートさせることで新たな歴史像を提示し、2007年にもその補論を展開している。その後、年市ケルンで都市史研究叢書の一冊として企画されたヨハネクとシュトープの共編による市場史論文集(1996年)、南フランス・フララン研究集会での研究大会の報告集(1996年)⁷⁾、ロンドン大学の企画刊行物(2000年)、イタリア・ダティーニ経済史研究所の企画による市場史研究会報告集(2001年)、そして2000年以降ほぼ毎年刊行される何らかの市場・商業・経済環境に関わる論集など、市場に関する共同研究が継続して取り組まれてきた。ちなみに、1996年は市場史の当たり年で、カナダ史学雑誌でもイギリス中世市場史の企画が行われている。また、2007年にはヨーロッパ全域を射程に入れた市場史の論集が二冊も著された。地方史に目を転じると、ノルマンディーの市場・流通史に関する集会報告が近年出ている(2010年)。最後に、2007年と2011年には20世紀後半の中世市場史研究を牽引してきたイギリスのマンロー氏とブリットネル氏への献呈論集がそれぞれ刊行されて、中世後期を中心に商業・市場史の個別論稿が多数含まれている。

翻ってわが国西洋中世社会経済史学界の動静を省みるに、東大と九大の経済史グループを中心に成果を重ねてきたものの、ここ最近あまり新しい成果が出てきていないのは、残念というしかない⁸⁾。本稿の執筆も実はこうしたわが国学界の低調さに対する反省からスター

6) アブナー・グライフ著、神取道宏・岡崎哲二共訳『比較歴史制度分析』(NTT出版、2009年)。

7) この論集の詳細は、拙稿「ヨーロッパ中世の市場と権力の関係—フララン報告論文集を中心とする比較史的再論—」『市場史研究』20(2000年)19-39頁を参照。

8) わが国学会におけるこの20年間の主な中世西欧市場史研究として、まず九州大学の市場史研究グループの成果として、田北廣道「イルジグラーの中世後期ケルン「経済構造の転換」論の諸問題」『比較都市史研究』2-2(1984年)。同『中世後期ライン地方のツンプト「地域類型」の可能性—経済システム・社会集団・制度』(九州大学出版会、1997年)。丹下栄「西欧中世初期における塩の生産と流通」『下関市立大学論集』39-1(1995年)。同『中世初期の所領経済と市場』(創文社、2002年)。拙稿『中世フランドル都市の生成—在地社会と商品流通—』(ミネルヴァ書房、2001年)。拙編『伝統ヨーロッパとその周辺の市場の歴史』(清文堂、2010年)などがある。またこの3名の個別報告も含んで、森本芳樹氏が中心となって企画された2つの中世西欧市場史研究のシンポジウム記録として、『市場史研究』14(1995年)と『社会経済史学』63-2(1997年)がある。また、他の研究成果もふまえて、わが国学界の動向については、勘坂純市「中世西ヨーロッパの経済」馬場哲・小野塚智二編『西洋経済史学』(東京大学出版会、

トしている。現在、近代以前を対象とする社会経済史学、とりわけ西洋中世社会経済史研究はかつてのパワーをすっかり失っているが、ヨーロッパでも確かにその傾向は認められつつも日本ほどではない⁹⁾。地元の歴史を地元の人物たちが行っているからである、と片づけるわけにはいかない。すでに述べたように、ある者は新しい問題関心とより精緻な理論実験をつねに提起し、またある者は中世の社会経済的現象を文化や政治と同等の考察対象として取り上げ続けている。

以下では、中世盛期・後期のフランス、イギリス、低地諸地方（ネーデルラント）の市場・流通に関する研究を中心に、1990年代以降の欧米中世経済史学界の成果を整理していきたい。まずは、欧米における中世市場史研究が「定期市」〈periodic market〉に焦点を当てることの歴史的な意味を考えることから論を起こしたい。ついで、アトランダムに中世盛期・後期市場論の多面的なアプローチとそれらの成果の特徴を述べていく。なお、本稿末尾には1990年以降の筆者が目にした限りでの関連研究の一覧（刊行年順）を付しているの、注記のない文献はすべてこちらを参照いただきたい。他方で、日本で執筆された日本語文献や1990年代以前の文献、他領域の参考文献のみは、逆に脚注に記すこととした。

1 定期市と中世ヨーロッパの関係性—市場の用語法から

中世ヨーロッパ社会においては、比較的大きく成長した一部の都市を別とすれば、たいてい市場は毎日ではなく「定期的に」開催されることが普通である。低地地方（ネーデルラント）からドイツ諸邦の自治都市に代表されるように、一定の自治権限を封建的領主層から獲得して、市庁舎や取引場、さらには公共の広場を自前で持つようになっても、その市場に適した空間で毎日市場を開いていたわけではない。また、営業主体である商人や手工業者のなかには、自身の店舗兼家屋を持つ者も多数出てくるが、彼らとても通りに面した窓板を降ろして、そこに商品を陳列することを日々行っていたのではない。取引は通常一定の間隔をもうけてある日一斉に行われることが、むしろ中世後期に向けてはルールとして定まっていく傾向にさえある。たいていの場合、集落内のこうした日常的需給に関わる取引は、特定の曜日を市日とする形態、すなわち「週市」〈weekly market〉（英語）〈marché hebdomadaire〉（フランス語）—文献では単に〈market〉〈marché〉と表記されることも多い—の制度に落ち着いていったと考えられる。毎日市（恒常市）は例外的なもので、圧倒的に週市という定期市の形態が多かったのは、おそらく当時の社会の需給水準にそれが適合していたからということになろう。これは需要（消費）の面からだけではない。それと同時に、供給（生産）

2001年）13-34頁を参照。

9) 欧米における中世社会経済史研究の今日的状況については、巻末文献一覧にも挙げた、2003年のシュミット・エクスレ共編の学界動向論集、2011年のフィレンツェで刊行された西欧経済史学界の回顧と展望を取り上げた論集が詳しい。

の面から見ても、当時の生産力、技術水準からすれば、十分な供給のためには相応の準備期間が必要だったと考えなくてはならない。さらに、こうした週市の形態が今でも存在し続けているように、定期市には各種の取引が一斉同時に実現する、すなわち市場参加者が一時期に集中するというメリットがある。思わぬ顧客層が現れる、売り手間にも一定の取引が生まれる、一対一の単純な相対取引を越えて複数の取引が連関する、それによって精算の仕組みが工夫されるといった現象さえ現れてくる。最近では、市場の劇場空間的要素に注目する研究さえもあり、これもまた重要な論点として受け止められている（後述）。

他方、定期市にはもう一つの重要な形態が存在した。週市ではなく、年市（歳市）である。年市は週市と異なり、1年を周期として毎年決まった日を開催日とする市であり、起源の面では聖人の祝祭日などと結びついて始まったものも多い¹⁰⁾。開催頻度の面から、日常の需給関係に関係するというよりは、むしろ特定の季節的商品・遠隔地商品の取引場として発展するのが一般的である。週市が当該集落とその周辺地域の日々の需給に直接対応した市場の性格を前面に出しているのとは、その意味では経済機能を異にしているといえる。年市は各地で生成したことが知られ、1990年以降も、耐えることなく各地の年市に関する個別研究が積み重ねられてきている。その代表は、1999年のクレマンによる南仏オクシタニーの年市通史である。特にフランス学界で顕著な研究分野として、個々の年市に関する商業史、制度史、あるいは政治権力史の研究が、各々小論ながらも脈々と受け継がれているのを、巻末の文献一覧から読み取ることができよう。

欧米での「年市」用語は言語によりまちまちである。たとえば英語世界には〈annual market〉と言う「年市」表記法もあるが、通常は〈fair〉の一語でこれを表す。フランス語、イタリア語も同様で、それぞれ〈foire〉〈fieri〉が一般的に年市を意味する。逆に、ドイツ語では〈Jahrmarkt〉という表記が普通は使用され、〈Messe〉の語は特定の大規模化した年市を指すために残されていることが一般的である。さらにドイツ語の〈Messe〉については、国際的な金融センター化した決済型大市を〈Wechselmesse〉、商品取引中心の大市を〈Warenmesse〉と区別することも多い。同じ大陸でも、フランス語は前者を〈foire de change〉と表記することはあるが、後者のための特別な表現方法は見られない。また、オランダ語には〈jaarmarkt〉の表記法、すなわち文字通り「年」＋「市」の表記方法しかない。なお、年市のなかで、開催日数や取引量などの面で巨大化したものに、わが国学界では「大市」の語を当てることが多い—シャンパーニュの大市〈foires de Champagne〉など—が、これなど英仏では「年市」であり、ドイツ語だけは「大市」の語が使用されているということになる。

ちなみに中世後期以降のドイツ語圏・バルト海沿岸圏をエリアとする市場史研究では、〈Messe〉と〈Jahrmarkt〉とを可能であれば区別しようとする傾向がある。1996年のヨハネ

10) 特に、聖人祝祭との関係については、拙稿『フランドル都市の生成』第3章。

ク・シュトープ共編の論集におけるイルジグラー、オプル、ラウシュの論文はその良い例である。オプルにいたっては、ウィーンの年市をどちらに表現するべきかを問題としている。イルジグラーは、2007年のイルジグラー・ポーリイ共編の論集でも同じ用語法をとっている。また、この2007年論集でデンマークの年市をまとめたリスの論稿は、フランス語で書かれたものだが、やはり〈foire〉と〈marché annuel〉を区別して用いることで、ドイツ語同様の両語併記法を採用している。これもまたイギリス、フランスではあまり見られないことだが、英仏空間とドイツ以東の空間それぞれにおける市場発展の歴史的経緯を比較していく上では、用語法の比較は今後おもしろい切り口になるかもしれない。

欧米中世学界が一さらには一般的に経済学のテキストもまた一般的によく行う表現は、「年市」と「週市」のセッティングである。英語で markets and fairs, フランス語で foires et marchés, イタリア語で fieri e mercati, スペイン語で ferias y mercados と、語順はまちまちながらも、ヨーロッパ言語は「市場」を二語の組合せ（複数形）で表現することをむしろ慣わしとしている。2001年に、アイルランドでもアイルランド市場に関する初めての総合比較研究が刊行されたが、これも fairs and markets を表題とする。2002年のトプノによるブルゴーニュ地方市場史、2004年のペトロヴィストによる西フランス一地方の総合的な市場史研究、いずれも両語を併記した題目である。

そもそも、この表記法は中世後期以降歴史的に定着してきた表現である。ともに「定期市」であると言う理由からだけでなく、実際に両者が相互に機能を分担しながら、地域経済のなかでは分けがたく結びついていたからであり、さらに市場権の管理という点では両者が同じ次元に位置していたからであろう。また、市場は一種の非日常的な劇場空間である。多くの人々が迷い子のように取引空間の間をさまよい、ある時は大道芸に出くわし、ある時は賭け事に興じて一喜一憂する時空である¹¹⁾。都市などの当局は、そのため治安の維持という点からもできるだけこれらを一括して管理するようになっていったものと考えられる。最後に経済的視点からも、後述するように農村年市の多くは決して大規模なものではない。また都市内の年市でも、実は毎週の週市が少しだけ姿を変えた程度のものも多数中世後期には開かれるようになっている。

以上を総合すると、中世から近世の農村世界において、「年市と週市」という用語法は自然の表記と言える。セットで表現されなければ実態を表さないとさえ言ってよい。現在の欧米中世史学界などに見る慣例的な用法は、その意味では歴史的な体験の延長線上に定まってきたものをベースにしている、ということになる。

11) 欧米中世史学界の成果でも随所に指摘されるが、特に2004年のペトロヴィストの地方史研究、2012年のリーの論文などを参照。また、翻訳物であり、対照時期も近世を中心とするが、ジャン＝クリストフ・アグニユー著、中里壽明訳『市場と劇場—資本主義・文化・表象の危機、1550-1750年—』（平凡社、1995年）がこのテーマに関する最も重要な参照枠を提供する。この原著自体は1986年にケンブリッジから出版されている。

2 市場開催と領主諸権力の関係—中世盛期を中心に—

このテーマは、中世盛期（11-13世紀）が中心となる。しかし、権力分布も地方ごとの差異が大きく、また地方によっては市場の制度化過程が遅くなる場所もあり、中世後期にかけて連続して検討されるべき分野である。

この問題領域は、中世初期経済史（6-10世紀）との接合点も多く、市場の起源の解明とも関係する。市場は自然に生まれたのか、権力によって設立されたのか、明快に語る市場開設文書のようなものがきわめて限られているために、なかなか結論の出ない問題である。たとえば、残存・伝来する「市場開設文書」の限りでは、少なくとも市場はその時点で開設されたと言えるかとなると、他の周辺の状況証拠を考察しないととても断定はできない。記録の文言は断片的である上に、決定事項しか述べないことも多い。つまりは既存市場をただ認可しただけであっても、市場の「開設」を「認可」した文書であることにはかわりはないからである。いずれにしても、諸状況を総合的に鑑みながら、間接証言も駆使して蓋然性の高い結論に持っていくしかない。

この領域で注目されるのは、イギリス学界、特にR.ブリットネルの一連の研究成果である。彼の市場史研究は1970年代末から引き続いてなされてきていた¹²⁾が、その総括的な著作が1993年と2004年に、さらに論文集が2009年に刊行され、かつての個別論文での見解をより広い文脈に据えて読むことができるようになった。また、この間にはイギリス都市史研究の中世編において総論を執筆する（2000年）他、いくつも共編による論文集も企画しながら、多くの問題整理や新たな問題提起を行っている。

もともと、1980年代前半の頃の論文で彼が示していた法制史の見解は、これらの概論的研究書でも、社会経済史的なバックボーンを伴って再び述べられる。彼によると、本来的には自生的な現象であったアングロ・サクソン時代の市場—少なくとも王権らの公認とは無縁に機能していた市場—があり、それがノルマン朝以降、特に12世紀後半以降のプランタジネット朝下で権力サイドによる権利体系の整備が進むなかで、文字に記録されて、明確に区切られた権利になっていくという。このプロセスは法制的な進化であると同時に、社会経済的には市場の増加を生み出すような地域社会内部での経済発展と関連している。特に13世紀に入ってジョン王治世以降の変化は明瞭であり、ちょうど13世紀に入った頃より、それまで通常認めてきた多くの市場に対する開催認可に対して、国王サイドが一定の制限を設けていくのが見て取れる。市場を認可する王文書において、「法に従い」「慣習に従い」といった月並みな表現が変わって、「Xの市場の妨害とならないように」といった類の文言が加わって

12) 1990年代以降にも彼の論文は相次いで出ているが、80年代以前ではR. Britnell, "English markets and royal administration before 1200", *Economic History Review*, 31, 1978, pp. 183-196; Id., "King John's early grants of markets and fairs", *English Historical Review*, 94, 1979, pp. 90-96が代表的なものといえる。いずれも2009年のヴァリオルム社刊行の論文集には採録されている。

る上に、ついには市場間での争いが生じてその調停者として王権が立ち振舞うという事態も生じる。全体を通して、13世紀を通して、王権による、あるいは法学者の学識的見解によって、イギリスの市場開催は一定の枠組みを与えられていくこととなる。ラトガース大学（アメリカ）のマッシュャールによる法制史の見地からの論文（1992年）も、同じ方向で議論を展開する。以上の見解はわが国の勘坂純市氏によっても研究されてきた¹³⁾が、1990年代半ばには一応の総合的成果を得て、イギリスについてはほぼ決着したテーマといえようか。

フランスに関しては、この問題に関して1990年代は目立った成果はなかったが、市場の自生的側面と事後の公的追認、あるいは制度化というシナリオ自体は、多くの研究者によっておおむね共有されていると見られる。1996年刊行のフララン集会報告集では、ブリットネルのイギリス市場史報告とともに、フォシエが北フランス・ピカルディー地方を事例に同じ見解を示している。しかし、フランス学界がより強調するのは、むしろ比較的早い時期での自生的市場に対する領主権の関与・統制であろう。中世後期ベリーに関するミショー・フレジャヴィルの論文でも、市場の自生的生成に触れつつも、その調整と相互関連の問題が議論の焦点となっている。

フランス王権による市場統制の側面まで含めて、この問題を西フランスから南フランスにかけて総合的に取り上げた本格研究が、ペトロヴィストによって2000年以降相次いで刊行されている。早い時代から統制の進んだノルマンディーと比して、西フランスのオニス・サントンジュ地方などでは、王権の統制が中世後期まで及ばず、長く領主制的な市場ネットワークが存立したとする。対して、トゥールーズ地方など南フランスは王権の進出が13世紀に急速に進んだことで、王権の関与はずっと早かったとされる。1998年のコトヴィツキンのブルゴニュ・オセール地方、2006年のアルヌー・テイエ共名の、2010年のテイエ単独のノルマンディー地方に関する諸論文などもあり、地域ごとに比較しながら詳細な議論がなされるとより興味深い。そのためには、各地域の権力関係を詳細に描き出すという封建社会史的な研究成果（これまで各諸邦を対象に相応に行われてきた研究群）を見返して、一定の地域的差異に関する見通し—ある程度理論的とも言える見通し—を得ながら進めていくことが肝要である¹⁴⁾。

3 地域経済の推移と定期市

この分野の研究は以前から多い。特に、イギリス史では個々の都市史研究でも自ずと触れられてきたものであり、フランス史でも、70年代のシャルトル、ランス両司教座都市史に關

13) 勘坂純市「中世イングランドにおける市場開設権と領主権」『土地制度史学』140（1993年）17-35頁。同「13世紀イングランドにおける市場開設と賦役・貨幣地代—1279年のハンドレッド・ロールズの分析を中心に—」『社会経済史学』60-4（1994年）1-32頁。

14) フランス中世の市場史の動向を的確に整理した、大宅明美「フランス中世の地方都市と市場」拙編『伝統ヨーロッパとその周辺の市場の歴史』（清文堂、2010年）45-68頁もあわせて参照。

する学位論文著書でも、重要な一章を構成していた。

ある中心的な集落の市場に焦点を当てて、経済的実態としての市場の全貌を描き出すことが目的であるから、法制的な変遷以上に、社会経済的な状況を語るような史料のまとまった残存が不可欠な研究領域である。社会的分業状況がある程度判明しうる人頭税等の徴収記録がその中心となるが、1995年のコワレスキのエクスター市場の研究、1997年のマッシュャールの市場ネットワーク研究は、都市・農村間の社会的分業を前提に、むしろ社会統合の場として、各中心市場を場とする社会関係のあり方、あるいはその変容の過程を描きだそうとしている。特にマッシュャールの研究は、13・14世紀の人頭税記録を縦横無尽に駆使し、ハンチントンシャの事例分析などを通して、都市内の社会的分業、周辺地域と中心集落との広域的な分業、外国人商人の積極的なイギリス市場開拓などについて、詳細な議論を行っている。マッシュャールによると、13世紀後半には都市・農村間に濃密かつ円滑な物流ネットワークが構築され、その機能性は王権による臨時の物資徴発にも随時対応できるほど優れていたという。なお、近年この種の研究では、取り扱う史料をめぐって史料論が精緻になさるようになってきていることも付言しておきたい（公証人記録と取引の関係を展開する2012年のミルトンなど）。

加えてこの分野で認められるのは、特にイングランド史において顕著な傾向であるが、黒死病による経済史的インパクトを従来のカタストロフィックな位置づけから引き離し、中世盛期から黒死病を経て中世後期にいたる時代の経済を、停滞や危機の時代として捉える定番の姿勢から脱していることである（1990年の二論文からも確認できる）。詳細なトレンドについては当然論者によって違いもあるが、この間の経済プロセスは危機的状況のなかでの「再編」あるいは「転換」として語られるのが一般的となっている。トレンドの違いはむしろ地方間の差異として、時にはそれら全体が一つの構造として理解されることもある（2008年のドッドとブリットネル共編の論集など）。

また、これは西ヨーロッパのどの地域にも共通の傾向として、中世盛期から後期にかけては中小都市群の台頭とそれが果たす経済的意義に関する議論が非常に盛んである。とりわけ市場町とも定義される「小都市」についてのイギリスでの研究は、地方史的成果も含めれば、別稿で整理していく必要があるほどに多い¹⁵⁾。フランスでもブル（bourg）が同様の位置づけで注目される。以下では、いくつかの成果をピックアップしていくこととする。

Ch. ダイヤーはイングランド後期に成長著しい中小都市の経済機能に以前から注目してき

15) イングランド中世後期から近世にかけての中小都市の発展とその意義に関しては、わが国でもかつて酒田利夫氏が注目していた。酒田『イギリス中世都市の研究』（有斐閣、1991年）、同『イギリス社会経済史論集』（三嶺書房、2000年）など。最近では、イングランド中世後期における定期市と市場町の増加、その後の都市化による小売業態の全般の変容過程について、川名氏によって適確な問題整理がなされている。川名洋「中世・近世イングランドの商業化—都市史の視点—」中野忠・道重一郎・唐澤達之共編『18世紀イギリスの都市空間を探る—「都市ルネサンス」論再考—』（刀水書房、2012年）、188-208頁。

たが、1996年論文は、まさしく都市・農村間の経済利害関係を新興市場町の市場取引状況から描き出し、2002年には、かかる小都市の果たした経済変革インパクトを強調している。中世盛期以来の都市とその周辺農村部という構造化しかけていた経済地理が、14世紀以降大きく変化しつつあったことを新たな史料によって提示しているのである。その論点は傾聴に値する。96年のメイトの論文も、14-15世紀のイングランドにおける地方内での活発な市場間競争の事例を示している。

構造転換の指摘、あるいは市場環境そのものの変化に関しては、2012年によく刊行されたハッチャー教授献呈論集において、ディヴィスとリーがそれぞれ中世後期の市場ネットワークの変化を問題にしている。そもそもこの論集は西欧におけるペスト後の破局説を退ける、あるいは相対視する方向ですべての論稿が執筆されているが、サフォーク州の小市場町クレア Clare の事例分析からディヴィスは、ペスト後従来の領主制的規制が弛緩し、柔軟な市場経営が現出するが、やがて都市や市場町の住民自身がその経営を引き受けて新たなルールを構成していくと述べる。取引費用はいくぶん上昇するが、領主的干渉の度合いは下がり、日常的消費者向けの堅実な小売業態が生まれてくる、との見取り図が示されている。リー論文は、14世紀後半から15世紀前半の年市の普及・拡大は限られた財貨がより有効に配分されるシステムの形成として読み解いていくべきとする。年市はその限られた時空性ゆえに限界を持つものの、15世紀以降も常設店舗化した小売業とも長く共存していくとの指摘も忘れていない。また、ロンドン商人が次第に全国市場に参入してくるが、彼らもまた地方年市を仕入れ元から販売相手まで、さまざまに活用するという。

また、彼らとは別に、もともとイタリア中世都市経済史をフィールドとしてきたアメリカの中世経済史学会の重鎮エプスタインが、取引費用概念を援用してイングランド中世後期の年市普及論を語ったのは1994年のことである。15世紀から16世紀にかけてイングランドで農村年市が増加することをめぐって、一般的にはペスト沈静による人口回復で説明されてきたが、エプスタインはこの見方をとらない。彼によると、市場（年市）の増加は実際には14世紀後半、すなわちペスト直撃による人口減少期に入った頃には始まっているという。これは交換が縮小していたからではなく、むしろ高価格化した農産物、工業製品の国内市場が拡大し、その利益を掴み取ろうとした結果ではないかとする。これは、それ以前まで王権によって体制化されていた市場の配置を覆して、新たな財の分配ルートを創りだしたことを意味する。いわば混乱による物価高騰期における自由競争の結果、農村市場が増加したとも表現できるが、それはすでに硬直化していた流通機構の改変を促したという。具体的に種々の抗争を経て、領主権や都市の周辺領域に対する裁治権の弱体化という「制度改変」が生じたことは大きな意味があり、国内流通の取引費用を抑えることにつながった。流通網もやがて地域別の特化（専門化）を先鋭化することで、こうした新しい年市の市場経済網に適合していたとす

る。田北廣道氏が14-15世紀ケルン空間で検証したのと同類の「経済構造転換」¹⁶⁾がイングランドで起きていたということか。確かに、そうでなければ16世紀までの一貫した農村年市の持続的増加は見込めまい。

経済構造転換のモデルは、封建的な桎梏・規制の撤廃を「制度的改変（変更）」〈institutional change〉と読み変えているだけではない。たとえば、大塚史学の「局地的市場圏」論とは根本において異なる史観がベースにある。エプスタインにおいては、想定される市場が週市ではなく、農村部市場町の年市である。また、年市の機能からしても、当初より広範な市場圏を築きながら国内市場の一構成要素として発展したと見なされている点で、狭い局地的エリアだけでの分業が想定されているのではない。また、イギリス学界の趨勢を見れば、地方市場町を核とする流通再編のモデルは、農村部だけでなくロンドンなどの大都市の発展ともリンクして構想されている。さらに国は異なるが、ホラント地方を対象にして中世後期の市場構造、市場関係の変化をまとめた2011年のデイクマンの仕事も同じ流れのなかにある。

以上、中世盛期から後期にかけて、特に14世紀以降各地に普及した多数の小規模な年市に対する関心は非常に高い。ただし、2000年以降の研究では、これら新興の市場町と既存の古来の都市市場との関係、また大規模都市における多様な取引形態にも注目が及んでいる。2006年と2007年の二つの研究報告集は、現物取引と信用取引の関係、定期市による商売と常設店舗による商売の関係などを取り上げている。特に、都市部における小売りの多様な形態の出現について、それと定期市のシェアとの比較などは史料が限られているとはいえ興味深い。

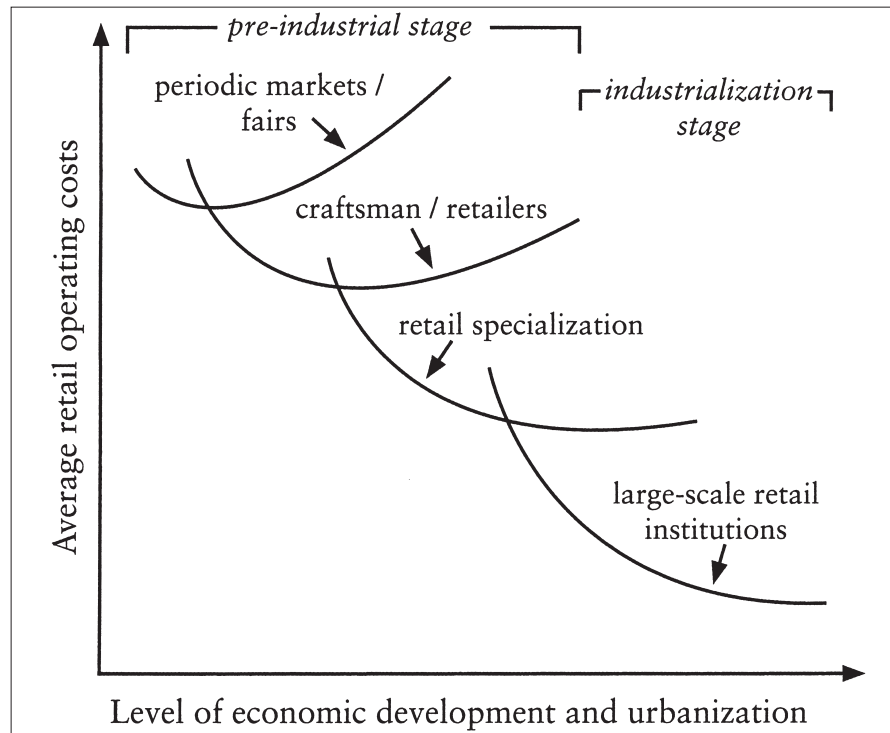
以前より、たとえばブローデルによって経済の三層・多層構造は指摘されてきていた¹⁷⁾。交換システムは一つではなく、複数であること。そもそも商業発展自体が単線的な進化をするのではなく、それもまた複線的であり、同時期に多様な商業施設や商人の形態が並存するというのは当然ではあるが、現在はこうした一般論を超えて、種々の各論が史料実態を踏まえて展開されるようになってきている。

2006年論集に掲載された各論は、週市や年市といった定期市中世後期の具体的な相貌をよく示す論文を多数収録している。ここで肝要な点がもう一つ、常設店での取引を定期市のそれよりも水準の高いものと決めつけられないことである。階層別に生活圈や行動様式が異なる上に、商品によっても取引形態における向き不向きが存在する。従って、定期市は遅れた経

16) 田北氏の中世後期ケルン市場構造の研究は、前掲注8にあげた文献を参照。彼はトリーア大学のF.イルジーグラー教授が提示するモデルをもとに、自身の見解を発展させた。

17) フェルナン・ブローデルの大著『物質文明・経済・資本主義（15-18世紀）』は、経済の3層構造にあわせた3部構成である。わが国では、みすず書房が、底辺の生存経済部分＝第1部を『日常性の構造』、通常の交換経済部分＝第2部を『交換のはたらき』、最高位の資本主義的な利得拡大型経済の部分＝第3部を『世界時間』と題して翻訳出版している（いずれの部分ともに2分冊構成で合計6冊からなる）。訳者ならびに刊行年は、それぞれ、村上光彦・1985年、山本淳一・1988年、村上光彦・1996-99年である。

図 経済発展・都市化の推移と小売の諸形態



(Blonde, Stavel, Stobart, Van Damme (2006), p. 13より)

済段階に対応していて、経済史的には周延的な現象と理解するような見方は、少なくともまだ15-16世紀の段階で早計に述べるべきではなく、論集の著者たちもその論調ではない。上の図は、2006年のブロンデ、スターベルら4名の共編による小売業全般の変容を問題とした論集からの抜粋であり、小売業の種々の形態を発展段階的に整理したものである。縦軸の取引費用低減率と横軸の都市化プロセスの双方から見ても、明らかに定期市は最も遅れた段階にある小売形態であることは疑いない。しかし重要なのは、この常設的とはいえない小売形態がその後も地域性や社会状況に適応して西欧世界に残存し、機能していく点に同論集の所収論文が言及していることである。この図もまた、各々の小売形態の相関関係や機能的柔軟性を巧みに曲線で描き出している。定期市と常設市の共存はその後も続くのであり、もっと複雑に見ていくべき現象である。この「棲分け」がどのように成立するのか、中世後期から近世、あるいは近代19世紀頃までの経済史を見ていく際には欠かせないポイントである。

フランス中世後期の定期市と地域経済の関係については、96年フラン論集の成果がある。なかでも、小規模な年市・週市群が農村内への商品貨幣流通の浸透の媒介役を担ったことを検証した、ミショー＝フレジャヴィルの論稿が目される。氏は地域内部における週市の開催曜日を一覧化することで、域内での商人の移動パターンを推論している。しかし、それ以上に重要な成果を出しているのがトゥールーズで学び、現在パリ第7に在職中のJ. ペトロ

ヴィストであり、彼ほど先述してきたイングランドの市場をめぐる最近の動向に敏感で、その成果を十分に吸収するフランス人研究者はいない。まず2004年に著した西フランスの地方市場史研究で、対象地域における年市・週市の開催日・開催地の詳細や地域内の商業網を明らかにするばかりでなく、各市場の経済趨勢、それに応じた統制・管理の変化を描き出している。特に、趨勢の問題では、1340年までを「絶頂期」〈apogée〉、その後のペストと百年戦争による影響の強い100年を「減退期」〈dépression〉、そして1450-1550年を「再建期」〈reconstruction〉と時期区分する。注目したいのは、第3の時期の取り扱いであり、いったん減退傾向に入った地方の商品貨幣流通を再活性化するに際して、「年市と週市」が経済の牽引役となったとの指摘は重要である。この他にも、同著において氏は、市場が時代趨勢に合わせて移動する様子、また市場開催空間のインフラ、実際の各市場の商圈、祝祭機能など市場の他の側面など、興味深い論点が盛りだくさんである。中世後期の地方社会が「年市と週市」なしには語れないことをよく示す力作と言える。

またペトロヴィストは、2007年にはトゥールーズ地方の商業史を素材に学位論文を提出した¹⁸⁾が、そこでの成果もまじえながら、南フランス諸地域における地域経済の実態に関する論稿を立て続けに発表している。2005年には山岳地帯フォワ伯領の商業史を取り上げ、多くの中小規模の集落＝ブル *(bourg)* が大都市と農村部を商業面で結びつける中間媒体となっていること、そこから地域を横断する通過商業と地域内で展開する在地商業の間には緊密な接合が認められることを実証し、中世後期の300年間には山岳辺境部においても「商業化」〈commercialization〉が進展したことを強調している。関連して、2009年の論文は、南仏のあるブルに伝来する通過税率・税額規定 *(tarif du péage)* を史料として、農村部のブルが商業機能を前面に出して中心地化し、地方と都市部との媒介として機能していた様子を事例として示している¹⁹⁾。

この他のヨーロッパ諸地域についても、多くの研究を通して中世後期に年市が農村部の奥深くまで普及していく様子が明らかになっている。英仏のような先進地帯とは経済面では対局ともいえる、ルクセンブルクのような山岳丘陵地域についても、1996年のポーリイ論文は、14-16世紀における年市の漸次的増加を地図にまとめて明示する。ヨーロッパ国際都市史協会による定期的な市場史研究会の総決算として編まれた2007年のイルジグラー・ポーリイ共編論集でも、同様の地図＝ビジュアル化作業が、ドイツ、スウェーデン・フィンランド、

18) *Naissance et essor d'un espace d'échanges au Moyen Âge: le réseau des bourgs marchands du Midi toulousain (XIe-milieu du XIVe siècle)*, thèse de doctorat, Université Toulouse II-Le Mirail, 2007. これは残念ながらまだ未刊行であり、筆者未見である。

19) 通過税規定史料を市場構造の解説を試みたわが国での先行研究例として、拙稿「13世紀初頭の流通税表に見るサンスの流通構造」森本芳樹編『西欧中世都市・農村関係の研究』(九州大学出版会, 1988年) 262-309頁, 同『中世フランドル都市の生成』第2, 5, 6, 7章を参照。また、フランス西部のボワチエの事例として岡村明美「中世ボワチエの流通税表の分析」『社会経済史学』56-6 (1991年)。さらに、この史料類型の体系的な活用が1970-80年代のブリュッセル学派(G. デスピー氏とその弟子筋)によって始まったこと、1990年代初めまで彼らの業績があることなどは、拙稿『中世フランドル都市の生成』169頁の注2, 3などを参照。

イタリア北部、アイルランドについてなされている。

ちなみに、このようにして農村部にまで市場経済の要素が深く入り込んでいたことと関連して、農民の間にも信用貸しがあり、農民もまた借金に関係するようになっていたことが、農村社会史や関連する史料研究から明らかになってきている²⁰⁾。こうした背景もふまえて、今後地域社会、特に農村部と市場経済の関係はいつその解明が欧米学界では進むものと見られる。

4 市場連関から市場統合まで？—英仏を超える中世後期市場経済の構造

市場現象は点的でなく線的でもなく、面的な現象である。すぐさま四方八方の他の市場、他の地域との相互関係を考えなくてはならないテーマである。市場史研究は、一個の市場を取り上げても関係論なしには済まない。以下で述べる研究動向は、この問題意識をさらに積極的に前に押し出したもので、最終的にはヨーロッパ全域を対象として、市場の「連関」〈relation〉〈interaction〉、あるいは「統合」〈integration〉を論じようとするものである。

2000年に刊行されたガロウェイ編による『交易、都市後背地、市場統合』という論文集について、末尾にあげた文献目録では中世史関係のみをピックアップしたが、この書の射程はもちろんだ近代まで及ぶもので、どちらかと言えば近現代史の前史としての中世史の取り扱いではある。しかし、そのことは、この研究グループが今日議論となっている「市場統合」の出発点を、中世後期の都市・農村関係に置いていること、そこから語らねば今日の市場統合の歴史とはならないとする彼らの歴史認識をよく表している。特に、そこでは中世後期ロンドンの成長とその周辺部への市場統合作用が論じられていて興味深い。ダイヤーの論文も市場統合を価格比較から考察していて説得力がある。さらに、2005年には、ジャイルスとダイヤーの共編になる『中世の都市と農村—対立・接触・相互関係、1100-1500年—』が同じ問題を継続して展開している。同年は、ダイヤーがそれまでの個別研究をまとめることも行っている。

20) 中世後期西欧の農村社会に普及した信用、リース契約、さらにその結果として生ずる負債の問題などは、ここ10年あまり農村経済史の分野でよく取り上げられてきている。1998年のマルドルーの単著、2000年のガロウェイ編論集のキーンのロンドンとその後背地に関する論文の他、M. Berthe (dir.), *Endettement paysan et crédit rural dans l'Europe médiévale et moderne*, Univ. Toulouse-Le Mirail, Toulouse, 1998; J. -P. Sosson, Cl. Thiry, S. Thonon et T. Van Hemelryck (dir.), *Les niveaux de vie au moyen âge. Mesures, perceptions et représentations. Actes du colloque international de Spa, 21-25 octobre 1998*, Louvain-la-Neuve, 1999; J. Claustre (dir.), *La dette et le juge. Jurisdiction gracieuse et juridiction contentieuse du XIIIe au XVe siècle (France, Italie, Espagne, Angleterre, Empire)*, Publications de la Sorbonne, Paris, 2006; J. Claustre, *Dans les geôle du roi. L'emprisonnement pour dette à Paris à la fin du moyen âge*, Publications de la Sorbonne, Paris, 2007; J. P. Van Bavel & Ph. R. Schofield (eds.), *The development of leasehold in Northwestern Europe, c. 1200-1600*, Brepols, Turnhout, 2008; Ph. R. Schofield & T. Lambrecht (eds.), *Credit and the rural economy in north-western Europe, c. 1200-c. 1800*, Brepols, Turnhout, 2009など最近の研究は多い。

この議論の背景として、1980年代まで盛んであった、かの中心と辺境の統合モデルによるシステム論がなお息づいている面もあるが、さらにはヨーロッパ統合という現実の政治・経済課題が世紀転換期における共通通貨ユーロの導入とともに一歩前進したことも大きい。今日のヨーロッパの経済統合、そして通貨統合を意識しながら、19世紀のドイツ関税同盟、あるいは19世紀ハプスブルク帝国経済の実態、中世から現代に至る西欧・東欧経済関係の歴史性など、種々の歴史的現象を念頭に置いてこの分野の検証は進められている。ドイツ学界の成果の一つあげると、2004年のデンツェル編論文集は近代史領域を中心としながらも、唯一ビヴコフが、中世からの近世にかけての東西ヨーロッパ間の商業的結びつきの強化と質の変化について、目の行き届いた問題整理を行っている。さらに2007年には、アームストロング他共編で、マンロー教授への献呈論集として『中世後期ヨーロッパにおける貨幣、市場、交易』が公刊されている。複数地点での価格の相対比較、信用取引の度合いやその展開地域を見ることで、「統合」の実態をより現実的に探ろうとしている（アロイショ、ニコラス、アングアの所収論文）。

他方で、この市場統合論では「年市」が考察の中心になることが多々ある。かつてケンブリッジ版ヨーロッパ中世経済史の3巻で、フェルリンデンは「年市の東漸運動」というテーゼをまとめた。中世盛期から後期にかけて、主要な「年市」がシャンパーニュの大市から始まって、次第にジュネーヴ、フランクフルトといった具合に東方にシフトし、ヨーロッパ内陸部の南北流通経済軸がフランスからドイツへと移動する、というものである²¹⁾。この見解は、特に中世盛期から中世後期にかけてのヨーロッパ全域を対象とするマクロな経済構造分析にとって、避けては通れない論題を今なお提供している。いわば、諸研究の出発点であることは疑いない。また、90年代以前では、ボーチエ、コールナールトなど²²⁾、中世後期から近世にかけての市場メカニズムや市場分布の変遷に関する重要な総論で見逃せないものはいくつかある。一市場を扱った個別研究でさえ、エピソード的な叙述を提供するだけでない。2003年のヘルデルブルムのアントウェルペン及びアムステルダム市場研究、同氏の2004年のシャンパーニュ大市の衰退と低地諸地方経済の構造変化の関係に関する研究も、市場経済の重心の推移を構造史的に問題としている。

全体として認められるのは、1990年代以降の研究では、シャンパーニュのような大規模年市以外にも、他地域における年市の遍在、またすでに前節で述べたような中世後期イングランドで群生した地方農村部の年市、さらには東欧世界に15世紀以降普及する年市と、実に多彩にして多様な年市が「発掘」されてきている。しかも2000年以降は、それらの成果をつな

21) Ch. Verlinden, "Markets and Fairs", in *The Cambridge Economic History of Europe*, vol. 3, Cambridge U. P., Cambridge, 1971, pp. 119 - 153.

22) R. -H. Bautier, "Les foires de Champagne, recherches sur une évolution historique", in *Recueil de la Société Jean Bodin*, t. 5, *La foire*, Bruxelles, pp. 97 - 147; E. Coornaert, "Caractères et mouvement des foires internationales au moyen âge et au 16e siècle", in *Studi in onore di Armando Sapori*, t. 1, Milano, pp. 355 - 371.

いで別の経済史ストーリーを構成しようとする試みがさまざまに出てきている。そこで登場するのが、「市場統合」もしくは「商業統合」〈commercial integration〉といった用語なのである。

2001年に刊行されたダティーニ研究所叢書の一冊として刊行されたカヴァチオッキ編『13-19世紀ヨーロッパ経済統合における年市と週市』は、全ヨーロッパ的な規模で研究者が集い、「統合」をキーワードに中世後期以降の市場変遷史を描いている。たとえば、ハンザ空間の形成による東欧エリアでの市場統合の深度を、価格史などの検証も入れて測っている。また別の論考は、イベリア半島、南フランス、南イタリアにおける農村年市の国際商業史的な意義—農村的であった世界と国際金融市場とを結びつける装置としての意義—を明らかにしてくれる。さらにイタリアの話が続くが、イタリアの南北における地域間交易史について新たな知見を提供している。たとえば、ビザンツ・イスラム支配下の頃のイタリア南部地域が北部と活発に交流し、アマルフィ、ガエタ、ヴェネチアといった新商業軸が早い時代に形成・発展していたこと、さらに中世後期には手工業的な北イタリアと原材料・食料品生産の南イタリアという、いかにもシステム論的図式を示唆するような相互関係が形成されることなど、当時のヨーロッパ世界の隅々の諸現象に満ちておりそれだけで興味深い報告集となっている。総じて「統合」が全体としてどれだけ進行したかの、判然としない面はあるが、今後も企画されていくテーマであると思われる。同年にエベリンクらによって編集されたイルジグラー教授還暦記念集でも、ヘンとホルバッハが中世末期のドイツ東部からバルト海沿岸地域における年市網の発達を詳述している。

以上、多様な商業的交換装置（定期市市場から店舗取引、さらにはイン・居酒屋まで、また信用取引の形態まで）が組上に上っているが、中世後期のヨーロッパ各地において議論の中核部分として注目されるのはやはり「年市」である。中世後期にかけて農村の各所に成長してきた在地市場という側面から、ヨーロッパ規模での交易網の要にあって国際商業の基地という側面まで、その相貌は多様である。そこから、特に年市に注目することで、地域経済とヨーロッパ経済の関係が同時に見えていこうとする姿勢が生まれてくる。すでに述べたエプスタインのイングランド中世後期の年市研究も、一方ではこの問題関心をベースにしていることを付言しておく。今や年市現象は、ヨーロッパ中世後期経済史を見るための欠かせない鏡となってきたように思われる。

2010年、フェルリンデンの年市東漸テーゼを再考する論文がフランス学界で発表された。「シャンパーニュの大市、そしてその後は？」と題するポーリィの論文がそれであり、中世盛期から後期にかけてのヨーロッパで、特に金融市場として繁栄した大規模年市（大市）の歴史を相互に比較しながら、それぞれの間の諸機能面での「継承関係」を再確認しようとする意欲的な論稿である（2007年にポーリィはその前段階をまとめた論文を著している）。各地に生起したさまざまな「年市連関（サイクル）」〈cycle des foires〉〈Meßzyklus〉、「年市循環」〈circuit des foires〉が検出されるとともに、それら相互の微妙なズレや重なりが明ら

かになっていく²³⁾。特に商業取引専用の年市と金融市場化する年市の区別、さらに各年市群を利用して主要な商人・顧客層の検証は、研究史的データを改めて比較史ながら整理した作業としては模範的であり、13世紀のシャンパーニュ大市「以後」の動向を読み解く新しいスタートラインを引いてくれたように思われる。今後は、個々の年市連関の構造や相互関係に関し、なお慎重かつ実証的な議論が必要となってくるであろう。

このほか、興味深い論文では、コワレスキが2010年に環境史に関する論文集に寄稿した「中世ブリテン島における漁業の季節性」がある。これはイギリスの海岸部において漁業が盛んになってくる中世後期において、沿岸部で漁期に合致して年市が各地で開催されていたことにとどまらず、魚群を求めて漁が南下するに依りて、年市開催も移動する様を描いている。なかには、漁期に合わせて一月以上も開かれる大型の年市さえ確認されている。シャンパーニュ大市のような金融市場とおよそ性格をことにする生産地密着型の市場であるが、それだけ大規模な年市循環がイングランド東海岸において生じていたことを示す、非常に重要な研究といえる（2003年の同氏の漁業史の論文も参照）。

以上の他、論文題目には「市場」や市場統合を示す用語を含まないものの、通常商業史、通商史の研究として、中世盛期から後期のさまざまな商品や商人の移動を取り上げて、地域間の通商関係史や中世後期西欧経済の広がりを示した成果が多数ある。ここでは、その一部だけを取り上げる。

まずイングランドについて、ハンザ貿易の主な舞台となったバルト海空間との通商関係が注目される。まず、中世イングランド商人活動史を描いてきていたロイド（2002年）が、12世紀から16世紀までの長期間を対象とするイングランド商人とハンザの関係史を書き直し、14世紀以降イングランド在地の商人団がハンザ交易に深く関与していく経緯を整理している。また、コペンハーゲン大学のヒューベルも、同じ2002年には英語の論文で、13世紀には早くもイングランド・ネーデルラントなどの北海沿岸地域とバルト海沿岸地域の間で、前者の地域に多数形成されつつあった労働者階層のために、後者からのライ麦輸出が、大規模かつ遠隔地間というよりも、「地域間商業」として始まっていたことを明らかにしている。特に地域間における圧倒的な価格「差」の存在は中世経済を牽引するファクターとして依然重要であり、ヒューベルはこの点を新関税徴収記録等のデータを駆使して明らかにする。すなわち、運送費など種々の取引費用による負担を吸収するほどに、北海沿岸地域では穀物価格が高騰していたことが、この穀物流通の早熟的な発展を促していたというわけである。14世紀前半のイングランドのハル Hull 港に入る穀物の価格動向を見ると、すでにイングランドの穀物価格形成にとって、バルト産穀物輸入は決定的なアクターとなっていたこともわかる。それは、ヨーロッパ東西間での農業・工業の分業が黒死病後に進んだとする一般的な見方に対して、むしろその起源を大いに遡らせる可能性を示唆している。また、バルト海沿岸地域

23) 複数の年市が1年を通して連動して機能する様子をこのような表現で表すが、後者は特にブローデルが好んだ用語法である。

での穀物生産への特化と西欧における工業特化の背後で進行したもう一つの現象、すなわち西欧での穀物生産の減退傾向についても、ペスト以前にその始まりを置くように暗示している。以上、中世ヨーロッパ経済全体の趨勢を読み直すに際して一考に値する重要な発言であるのは言うまでもない。

フランス史でも、2003年にM.トランシャルが、これまで本格的には取り上げられてこなかった西フランスの重要海港都市ラ・ロシエルの海上商業に焦点を当て、その内実を描き出している。ここでは、中世末から近世にかけて生じるポルトガルと低地諸地方・ハンザ空間の関係生成に関して、ラ・ロシエルの塩・ワイン輸出商業が関与していくこと、そしてラ・ロシエルが両者間の中継貿易拠点となっていくプロセスが描き出されている。その他、ベルギーのブルッヘ（ブリュージュ）について、2002年には一般向けの企画論集でブルッヘ市場の多面的性格が各方面から執筆され、さらに2005年のマレイの新著が13世紀から14世紀にかけての同都市経済の飛躍的成長を、特に信用取引と資本集積の機能の向上に焦点を当てて述べている。これもまた市場ネットワーク形成のなかで一都市の持った特異な機能分化を個別具体的に示した研究といえる。

さらに、商業史を越えて、いくぶん概括的とはいえ地域経済全体の趨勢を描き出そうとした市場経済趨勢史もいくつか出ている。文献一覧にもそのいくつかを示しているが、ここでは、本節で触れてきたような地域間経済の分業形成という観点でオランダ中世経済史の新たな流れをまとめた2010年のヴァン・バーヴェルの研究を挙げるにとどめておきたい²⁴⁾。

5 社会関係の構築から社会統合まで—むすびにかえて

一般的に市場史の研究には、二つのアプローチが可能である。一つは機能としての市場論、他一つは場としての市場論である。前者の方法は、これまで述べてきた系譜に属すが、後者は市場を「いち」もしくは「いちば」と呼ぶことでよく理解できる系譜のものである。市場空間そのものを中心に据えた分析が中心で、たとえば、都市・村落内の市場の開催地、特に市場広場などの物理的・地理的状況、さらには特定の市場をめぐる住民や市場参加者の間の社会関係などの分析があげられる。

広場としての市場の存在感は建築史の領域でもよく指摘されることだが、実際に市場という時空は商業以外の面でも多機能的であり、裁判・刑の執行、通達の告知等の場としてしばしば住民統合のための別の機能を担っている。さらには商業取引や単純な出会いによって教区や数村を越えた人的関係の構築、職種を越えた繋がり形成の機会ともなっていた²⁵⁾。こ

24) ヴァン・バーヴェルの近業の詳細は、筆者による新刊紹介（『西洋中世研究』2（2010年）218-219頁）を参照。

25) 特に、2009年に出たロンバル＝ジュルダンのパリの取引所市場の研究はこうした論点を多数含んだ社会史としての市場史である。詳細は、筆者に新刊紹介（同206頁）を参照。また、最近では2012年のサラザンの小論が、中世後期西フランスのベイ地方に生まれた市場が経済機能

のような社会関係の形成については、市場史以外の成果から判明することもある。たとえば、北フランスのサン・カンタン都市裁判システム史に関するアメルによると、市民が相互に契約を交わした際に都市当局の権威にすがって作成を求めることがあった契約書状〈chirographum〉の発行時期に関して、当時の会計年度末（種々の支払精算期、納期）に当たる6月に向けて契約文書が増えるのと同時に、一年の後半では「年市」の開催される10月にもう一つのピークがあったことが判明するという²⁶⁾。2012年の春に刊行されたミルトンのカタルーニャ地方の都市市場史は、この地域に大量に伝来する公証人文書を史料として、同様の契約締結パターンを週市についてより実証的に検出している。

ミルトンにしても、エクスターに関するコワレスキの研究（1995年）にしても、都市当局による市場の管理・統制を問題にしている。具体的な統制策の数々が決して封建反動のような性質ではなく、むしろ各々の時代の経済実態に応じた現実的政策であったと述べて、中世市場に関する認識を新たにしてくれよう。最近（2012年の春）、北アイルランド・ベルファスト大学のJ. デイヴィスは『中世市場の道徳』と題する大著を著し、中世後期のイングランド内の諸市場を対象に、市場規制、あるいは市場に関する規則の体系的な比較分析、そして市場を活用する商人の行動様式を分析したが、彼もまた中世後期当局の制限的に見える規則策定を一方向的に「規制」として位置づけてはいない。むしろ当局によるバランスこそ重要であるとし、さらには市場利用者自身にさまざまな規範意識が内面化されていたとも述べている。他にも、コワレスキの漁業と市場の関係を論じた論文（2003年、2010年）で、すでに中世後期の漁業界では極小魚の漁獲禁止に関するルールが存在したことが述べられるが、これなども紆余曲折を経ながら業者間で一種の職業倫理の形成がなされていったことを象徴的に示している。

98年にはJ. カーモードが規約、取引記録、遺言状の分析を通して1400人の商人たちの物的・心的実相を描いている。中世の市場経済を最前線で担った人々が、一方で都市共同体に対する強い意識を持ち、慈善活動や信仰生活の面でも存在感を大いに発揮していくそのプロセスやメンタリティがよく示されている。また、中世盛期・後期ノルマンディーの週市に関する学位論文（未刊行）の執筆者テイエ²⁷⁾は、2009年の論文で、ルーアンに発達した金曜開催の穀物市場が当局と商人のもとで制度化されていくなかで、あえて固定された「市場価格」を参照枠としながら真の商品価値が定まっていくシステムの一部を示している。テイエ

だけでなく、地方当局、住民の社会的な結合関係の場として重要であったことを示している。ほぼ同じ見解は、偶然にも同じ年に刊行されたリーの論文が、イングランドの年市について、「エンターテイメント、リクレーション」の節を設けて述べている（特に、Lee 2012, pp. 422-425.）。

26) S. Hamel, *La justice dans une ville du nord du royaume de France au moyen âge. Etude sur la pratique judiciaire à Saint-Quentin (fin XIe siècle-début XVe siècle)*, Brepols, Turnhout, 2011, pp. 212-214.

27) パリ第7大学に提出されたテイエの学位論文（未刊行にて筆者未見）は Theiller, I., *Les marchés hebdomadaires en Normandie Orientale (XIVe-XVIe siècles)*, Université Paris Diderot-Paris 7, 2004.

によると、このメカニズムによって、ルーアン金曜穀物市場は、穀物などの現物給付型の定期金設定、あるいは契約設定、契約不履行の際の負債額・延滞金設定の場としても機能したことがわかる。

最後に、レディング大学のベルらによる13-14世紀羊毛市場の共同研究（2007年刊行）にふれておこう。これは、羊毛生産で多額の資金を獲得していたイングランドの修道院と、フィレンツェやルッカの商人に代表される羊毛買付を行う大商人との間で取り交わされた、1230-1327年の間の伝来する5000通以上の羊毛購入契約書、特に1270年代以降のそれらを体系的に分析したものであり、これまでわが国で前近代的な前貸契約として理解されてきた仕組み²⁸⁾を解釈し直している。彼らは先物契約やオプション取引といった現代経済学概念やその現状と常に比較しながら、対象とする契約群を中世版の「先渡し取引」〈forward agreement〉として理解する。当時さまざまな用途のために多額の資金を必要としていた修道院は、質の良い羊毛を生産してその売約益を得ていた。他方、イタリアや南ネーデルラントの大商人らはその上質な羊毛に惚れ込み、通常の羊毛とは差別化してこれを高値で買い付け、大陸の毛織物工業生産地へ卸すことを慣わしとしていた。こうして両者の間で多数の契約が個々に結ばれた。契約によると修道院は金額の一部の前払いを受ける。それは数回に分割されることもある。商人は契約で指定された期日（通常は夏から秋の年市期間が多い）に製品である羊毛を受け取り、残金を精算する。この時の契約金額がどのようにして定められるのかについては、なお未解明な部分も多いが、年市などの市場で通常に供される羊毛価格や過去の実績、天候状況などが総合的に勘案されていることは明らかである。

1270年頃から契約は増えるとされるが、この頃はイングランド全域で羊毛生産の障害となる羊の皮膚病が蔓延した時であり、生産がやや不安定になっていた時代でもある。修道院としては、契約上の生産量を確保できない場合は市場であえて不足分を購入するまでし、契約分の羊毛を揃える必要があった。このリスクを抱えながらも生産者＝修道院は資金確保のためにこの契約を非常によく取り交わした。場合によっては品不足になる大商人らも、低利の利子を一定とりながらも契約金額を下げる、あるいは契約期間を延ばしながら修道院による羊毛生産の回復を促すなどして、粘り強く対応していることがうかがい知れる。投資においては得をするときもあれば損もする、という商人の実戦感覚・倫理が透けて見えるようである。大商人もまたこのヨーロッパ随一の羊毛の確保のために、生産者側といわば一体になって地場産業作りに貢献し、ほぼ安定した羊毛市場が形成されていったといえよう。

ちなみに、ここで問題とされる羊毛市場は、決して現代の商品先物市場のような取引所もなければ、それぞれ個々の随意契約でしかないが、全体として一つのシステムとして高級羊毛、ひいては高級毛織物製品の市場価格を一定の範囲で安定させていたと考えられる。このように、場としての市場（いちば）ではなく、システムとしての市場（しじょう）が機能し

28) 古典的な理解として、たとえば近藤晃『市場経済の史的構造』（未来社、1995年）235-272頁を参照。

始めていた様子が高級羊毛について描き出されるわけだが、それでも我々は、それが利潤追求の精神のみで運用されているのではないことに注意を払いたい。市場が社会から未だ完全には分離していない状況がそこには見て取れるのではなからうか。

わが国では森本芳樹氏がかつて、市場史研究会や社会経済史学会のシンポジウムの中で、前近代の市場をして、商人や荘園領主・権力当局のみならず、多様な社会層を結びつける「社会経済システムの凝集点」と述べ²⁹⁾、田北廣道氏はこれを「社会統合の場」と定義したことがある³⁰⁾。経済学的に見て、多数の小生産者を統合する「交換の場」と定義されただけではない。その社会的・文化的交換機能に注目する研究がその後これだけ増えてきたことからわかるように、そこで言われた「社会統合」とは文字通り「社会」の「統合」を意味していたと理解せねばならない。少なくとも中世後期の西欧にあっては、もはや「市場」なくして都市社会や地域統合そのものが成り立たなくなっていたことは疑いようがない。しかしそれは、あくまで「社会」が主役であって、「社会」が「市場」を包摂しその活力を血とし肉としていた、という意味においてである。「市場」は各地で大活躍を見せ始めるが、やはり「社会」の一要素であることを忘れることは未だなかったのである。

付記

本稿は、2012年6月23日（土）に京都女子大学を会場にして開催された「市場史研究会第57回大会（2012年度春季大会）」での研究報告「市場史研究の現状と課題—西洋中世経済史の立場から—」に、大幅な加筆と修正を施したものである。その大会が開催される直前、5月末に九大学生時代からの恩師である森本芳樹先生が東京練馬の自宅で急逝された。先生からいただいた数知れない叱咤激励に対して、これが何のお返しにもならないことは百も承知のうえで、ひとまずは本小論を先生の御霊前に捧げたい。

29) 1994年に行われた市場史研究会シンポジウムでのコメント報告として収録された、森本芳樹「市場史研究の現状と方向」『市場史研究』14（1995年）58-61頁を参照。

30) 1996年の社会経済史学会全国大会でのシンポジウム「市場史の射程」を掲載した『社会経済史学』63-2（1997年）1-9頁の田北による問題提起を参照。前注の森本コメントと並んで、この論稿は今でも中世盛期・後期市場史研究の指針となる。

付録 1990年代以降、中世盛期・後期西ヨーロッパ市場史主要文献一覧
 —イギリス・フランス史に関する業績を中心に— (刊行年順)

1990年

- Nightingale, P. 1990, "Monetary contraction and mercantile credit in later medieval England" in *Economic History Review*, 43, pp. 560-575.
- Penn, S. & Dyer, Ch. 1990, "Wages and earnings in late medieval England: evidence from the enforcement of the labour laws", in *ibid.*, 43, pp. 356-376.

1991年

- Duvosquel, J. -M. et Dierkens A. (dir.) 1991, *Villes et campagnes au moyen âge. Mélanges Georges Despy*, Editions du Perron, Liège.
- ・ Billen, Cl., "Binche et sa campagne: des relations économiques exemplaires (XIIe-XIIIe siècle)", in *ibid.*, pp. 87-109.
 - ・ Hoebanx, J. -J., "Routes du vin. Quelques itinéraires suivis par des vins domaniaux entre le Rhin et le Brabant Wallon au XVe siècle", in *ibid.*, pp. 383-404.
 - ・ Stiennon, J., "Les tonlieux de transit et le droit de pêche sur la Meuse namuroise au Moyen Âge à la lumière de deux documents cartographiques de 1502", in *ibid.*, pp. 653-675.
 - ・ Yamada, M., "Le mouvement des foires en Flandre avant 1200", in *ibid.*, pp. 773-789.
 - ・ Zylbergeld, L., "Les régulations du marché du pain au XIIIe siècle en Occident et l' Assize of Bread" de 1266-1267 pour l'Angleterre", in *ibid.*, pp. 791-814.
- Guilbert, S. 1991, "L'abbaye de Clairvaux et les villes de foires de Champagne", in *Histoire de Clairvaux*, Némont, Bar-sur-Aube, pp. 62-72.
- Farmer, D. L. 1991, "Marketing the produce of countryside, 1200-1500", in E. Miller (ed.), *The agrarian history of England and Wales, 3, 1348-1500*, Cambridge U. P., Cambridge, pp. 324-430.

1992年

- Demouy, P. 1992, "Les archevêques de Reims et les foires (XIe-XVe siècle)", in *Le marchand au Moyen Âge*, CID éd., Nantes, pp. 81-94.
- Dubois, H. 1993, "Les ducs de Bourgogne et les foires", in *Publication du Centre européen d'études bourguignonnes*, 33, pp. 163-176.
- Masschaele, J. 1992, "Markets rights in thirteenth century England", in *English Historical Review*, 422, pp. 78-89.
- Piponnier, F. 1992, "Boutiques et commerces à Dijon d'après les inventaires mobiliers (XIVe-XVe siècle)", in *Le marchand au Moyen Âge*, CID éd., Nantes, pp. 155-163.

1993年

- Britnell, R. 1993, *The commercialization in English society*, Cambridge U. P., Cambridge; rpt. 1996, Manchester U. P., Manchester.
- Dutour, T., Contamine, Ph. et Bertrand S. (dir.) 1993, *Commerce, finances et sociétés (XIe-XVIIe siècle). Recueil de travaux d'histoire médiévale offerts à Henri Dubois*, Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, Paris.
- ・ Abraham-Thisse, S., "Achats et consommation de draps de laine par l'hôtel de Bourgogne, 1370-1380", in *ibid.*, pp. 27-70.

- ・ Blockamns, W., "Aux origines de foires d'Anvers", in *ibid.*, pp. 21-26.
 - ・ Chevalier, B., "Les boucheries, les bouchers et le commerce de la viande à Tours au XVe siècle", in *ibid.*, pp. 157-169.
 - ・ Demurger, A., "Des marchands vénitiens à La Rochelle en 1430: les données d'un procès devant le Parlement de Poitiers", in *ibid.*, pp. 89-99.
- Masschaele, J. 1993, "Transport costs in medieval England", in *Economic History Review*, 46-2, pp. 266-279.
- Musset, L. 1993, "L'ancienne foire rurale de Saint-George-en-Auge (XIIe-XVe siècle)", in *Annales de Normandie*, 43-2, pp. 80-90.

1994年

- Dubois, H. 1994, "Espace de la foire et espace urbain dans les villes du royaume de France (XIIe-XVe siècles)", in A. Grohmann (ed.), *Spazio urbano e organizzazione economica nell'Europa medievale: Atti della session C23. Eleventh International Economic History Congress. (Milano, 12-16 settembre 1994)*, Napoli, pp. 128-141.
- Epstein, S. R. 1994, "Regional fairs, institutional innovation, and economic growth in late medieval Europe", in *Economic History Review*, 47- 3, pp. 459-482.
- Munro, J. H. A. 1994, *Textiles, towns and trade: essays in the economic history of late-medieval England and the Low Countries*, Variorum.

1995年

- Britnell, R. H. and Cambell, B. M. S. (eds.) 1995, *A commercializing economy: England 1086-1300*, Manchester UP., Manchester.
- Duvosquel, J. -M. et Thoen, E. (eds.) 1995, *Peasants and townsmen in Medieval Europe: studia in honorem Adriaan Verhulst*, Snoeck-Ducaju & Zoon, Gent.
- ・ De Hemptinne Th. et De Mey, L., "Le règlement de Philippe d'Alsace concernant les droits respectifs des «Quatre Seigneurs» sur le tonlieu de la ville d'Amiens. Notes préparatoires à une étude critique", in *ibid.*, pp. 151-167.
 - ・ Mene, D., "Small towns and the metropolis: the experience of medieval England, in *ibid.*, pp. 223-238.
 - ・ Van Uytven, R., "Stages of economic decline: Late medieval Bruges, in *ibid.*, pp. 259-269.
- Kowaleski, M. 1995 a, *Local markets and regional trade in medieval Exeter*, Cambridge U. P., Cambridge.
- Kowaleski, M. 1995 b, "The grain trade in fourteenth-century Exeter", in E. B. DeWindt (ed.), *The salt of common life: individuality and choice in the medieval town. Essays presented to J. Ambroise Raftis*, Kalamazoo, pp. 1-52.
- Nightingale, P. 1995, *A medieval mercantile community. The grocers' company and the politics and trade of London, 1000-1485*, Yale U. P., London.

1996年

- Desplat, Ch. (dir.) 1996, *Foires et marchés dans les campagnes de l'Europe médiévale et moderne. Actes des XIVes journées internationales d'histoire de l'Abbaye de Flaran, Septembre 1992*, Université de Toulouse-Le Mirail, Auch.
- ・ Britnell, R., "Les marchés hebdomadaires dans les îles Britanniques avant 1200", in *ibid.*, pp. 27-46.
 - ・ Cherubini, G., "Foires et marchés dans les campagnes italiennes au Moyen Age", in *ibid.*, pp.

- 71-83.
- Fossier, R., "Le problème des marchés locaux en Picardie aux XIe et XIIe siècles", in *ibid.*, pp. 15-25.
 - Martínez Sopena, P., "Foires et marchés ruraux dans les pays de la couronne de Castille et Léon du Xe au XIIIe siècle", in *ibid.*, pp. 47-69.
 - Michaud-Fréjaville, F., "Belles foires et marchés du Berry, XIVe-XVe siècles", in *ibid.*, pp. 85-103.
- Johanek, P. & Stooß, H. (hrsg.) 1996, *Europäische Messen und Märktesysteme in Mittelalter und Neuzeit (Städteforschung A/39)*, Köln.
- Blaschke, K., "Die Stadt Leipzig und ihre Messen. Funktionale Beziehungen zwischen Stadtgrundriß, Messebetrieb und Stadtbild", in *ibid.*, pp. 295-304.
 - Brübach, N., "Die Entstehung und Frühzeit der Frankfurter Messen", in *ibid.*, pp. 143-170.
 - Ennen, E., "Die Rheinlande, Mittel- und Osteuropa im Antwerpener Messenetz", in *ibid.*, pp. 87-104.
 - Henn, V., "Mißglückte Messegründungen des 14. und 15. Jahrhunderts", in *ibid.*, pp. 205-222.
 - Irsigler, F., "Jahrmärkte und Messesysteme im westlichen Reichsgebiet bis ca. 1250", in *ibid.*, pp. 1-33.
 - Jenks, S., "England und die kontinentalen Messen im 15. Jahrhundert und die Entstehung der Merchant Adventurers", in *ibid.*, pp. 57-86.
 - Jung, H.-K., "Hektor Ammanns Messenkarten: einführende Bemerkungen zur Konzeption", in *ibid.*, pp. 305-318.
 - North, M., "Von den Warenmessen zu den Wechselmessen. Grundlagen des europäischen Zahlungsverkehrs in Spätmittelalter und Früher Neuzeit", in *ibid.*, pp. 223-238.
 - Opll, F., "Jahrmärkte oder Messe? Überlegungen zur spätmittelalterlichen Handelsgeschichte Wiens", in *ibid.*, pp. 189-204.
 - Pauly, M., "Foires luxembourgeoises et lorraines avant 1600", in *ibid.*, pp. 105-142.
 - Rausch, W., "Jahrmärkte, Messen und Stadtentwicklung in den habsburgischen Ländern Österreichs", in *ibid.*, pp. 171-188.
 - Rösch, G., "Die italienischen Messen im 13. Jahrhundert", in *ibid.*, pp. 35-56.
- Britnell, R. 1996, "Price-setting in English borough markets, 1349-1500", in *Canadian Journal of History*, 31, pp. 1-15.
- Dyer, Ch. 1996, "Market towns and the countryside in late medieval England", in *Canadian Journal of History*, 31, pp. 17-35.
- Mate, M. 1996, "The Rise and fall of markets in Southeast England", in *Canadian Journal of History*, 31, pp. 59-85.
- Smith, R. M. 1996, "A periodic market and its impact upon a manorial community: Botesdale, Suffolk, and the manor of Redgrave, 1280-1300", in Z. Razi and Smith, R. M. (eds.), *Medieval society and the manor court*, Oxford U. P., Oxford, pp. 450-481.

1997年

- Masschaele, J. 1997, *Peasants, merchants and markets*, Macmillan, Basingstoke.
- Piponnier, F. 1997, "Des peaux pour tous. Artisanat et commerce de détail à Dijon au XVe siècle", in E. Mornet, et F. Morenzoni (dir.), *Milieux naturels, espaces sociaux. Études offertes à Robert Delort*, Publications de la Sorbonne, Paris, pp. 353-364.

1998年

- Kermode, J. 1998, *Medieval merchants, York, Beverly and Hull in the later middle ages*, Cambridge UP., Cambridge.
- Kotovtchikhine, S. 1998, "Foires et marchés à Auxerre aux XIIe et XIIIe siècle ou la lutte du comte et de l'évêque pour la conquête des droits seigneuriaux", in *Mémoires de la Société pour l'histoire de droit et des institutions des anciens pays bourguignons, comtois et romands*, 55, 1998, pp. 83-109.
- Muldrew, C. 1998, *The economy of obligation: the culture of credit and social relations in early modern England*, St. Martin's Press, New York.

1999年

- Clément, P. -A. 1999, *Foires et marchés d'Occitanie de l'antiquité à l'an 2000*, Les Presses du Languedoc, Montpellier.

2000年

- Britnell, R. H. 2000, "The economy of British towns 1300-1540" in D. M. Palliser (ed.), *Cambridge Urban History of Britain*, vol. 1, 600-1540, Cambridge U. P., Cambridge pp. 313-334.
- Bur, M. 2000, "Les "autres" foires de Champagne", M. Escher (hrsg.), *Städtelandschaft-Städtenetz-zentralörtliches Gefüge, Trierer historische Forschungen*, 43, Mainz, pp.349-366.
- Epstein, S. R. 2000, *Freedom and growth. The rise of states and markets in Europe, 1300-1750*, Routledge, London/New York.
- Galloway, J. A. (ed.) 2000, *Trade, urban hinterlands and market integration*, Centre for Metropolitan History Working Paper Series No. 3, Institute of Historical Research, Univ. London, London.
- Dyer, Ch., "Trade, urban hinterlands and market integration, 1300-1600: a summing up", in *ibid.*, pp. 103-109.
 - Eiden, H. and Irsigler, F., "Environs and hinterland: Cologne and Nuremberg in the later middle ages", in *ibid.*, pp. 43-57.
 - Galloway, A., "One market or many? London and the grain trade of England" in *ibid.*, pp. 23-42.
 - Keene, D., "Changes in London's economic hinterland as indicated by debt cases in the Court of Common Pleas" in *ibid.*, pp. 59-80.
 - Nightingale, P., "Norwich, London, and the regional integration of Norfolk's economy in the first half of the fourteenth century", in *ibid.*, pp. 83-101.

2001年

- Bogucka, M. 2001, "Fairs and culture", in H. Bräuer & E. Schlenkrich (hrsg.), *Die Stadt als Kommunikationsraum. Beiträge zur Stadtgeschichte vom Mittelalter bis ins 20. Jahrhundert. Festschrift für Karl Czok zum 75. Geburtstag*, Leipziger Universitätsverlag, Leipzig, pp. 49-55.
- Britnell, R. H. 2001, "Specialization of work in England, 1100-1300", in *Economic History Review*, 54, pp. 1-16.
- Cronin, D. A., Gilligan, J. and Holton, K. (eds.) 2001, *Irish fairs and markets. Studies in local history*, Four Courts Press, Dublin.
- Cavaciocchi, S. (ed.) 2001, *Fiere e Mercati nella integrazione delle Economie Europee. Secc.*

- XIII-XVIII., Le Monnier, Prato.
- Burgenmeier, B., “Théorie des marchés et histoire économique”, in *ibid.*, pp. 31-48.
 - Irsigler, F., “La fonction des foires dans l’intégration des économie européenne (Moyen Age)”, in *ibid.*, pp. 49-69.
 - Epstein, S. R., “Fairs, towns, and states in Renaissance Europe”, in *ibid.*, pp. 71-90.
 - Dubois, H., “Les institutions des foires médiévales: protection ou exploitation du commerce?”, in *ibid.*, pp. 161-184.
 - Britnell, R., “Local trade, remote trade: institutions, information and market integration, 1270-1330”, in *ibid.*, pp. 185-204.
 - Muldrew, C., “The legal context of local markets: the role of lawyer and local courts in defining market areas in England 1550-1800”, in *ibid.*, pp. 279-287.
 - Overton, M., “The integration of agricultural markets in England, 1200-1800”, in *ibid.*, pp. 289-308.
 - Munro, J., “The ‘New Institutional Economics’ and the changing fortunes of fairs in medieval and early modern Europe: the textile trades, warfare, and transaction costs”, in *ibid.*, pp. 405-452.
 - Casado Alonso, H., “Medina del Campo fairs and the integration of Castile into 15th to 16th century European economy”, in *ibid.*, pp. 495-517.
 - Kortlever, Y., “The Easter and Cold fairs of Bergen-op-Zoom (14th-16th centuries)”, in *ibid.*, pp. 625-643.
 - Benders, J. F., “‘Item instituimus ibidem singulis annis nundinas’. Fairs in the principality of Guelders, 1294-1543”, in *ibid.*, pp. 645-667.
 - Pauly, M., “Les marchés annuels en Europe aux XIVe-XVIe siècles. Etudes régionales et essai de classification”, in *ibid.*, pp. 669-683.
 - Eiden, H., “The fairs of Leipzig and the Eastern European economies (15th-18th centuries)”, in *ibid.*, pp. 723-739.
 - Stabel, P., “Markets and retail in the cities of the late medieval Low Countries. Economic networks”, in *ibid.*, pp. 797-817.
 - Denzel, M. A., “Der Beitrag von Messen und Märkten zum Integrationsprozeß des internationalen bargeldlosen Zahlungsverkehrssystems in Europa (13.-18. Jahrhunderts)”, in *ibid.*, pp. 819-835.
 - Bergier, J. -F., “Marchands en foires, entre confiance et concurrence”, in *ibid.*, pp. 837-846.
 - Martínez Sopena, P., “Ferias y mercados en la organización del espacio del Camino de Santiago. Siglos XI-XIII”, in *ibid.*, pp. 967-984.
 - Blockmans, W., “Transaction at the fairs of Champagne and Flanders, 1249-1291”, in *ibid.*, pp. 993-1000.
- Ebeling, D., Henn, V., Holbach, R., Reichert, W. und Schmid, W. (hrsg.) 2001, *Landesgeschichte als multidisziplinäre Wissenschaft. Festschrift für Franz Irsigler zum 60. Geburtstag*, Porta Alba, Trier.
- Henn, V., “Jahrmärkte und Messen im Weser-Elbe-Raum im späten Mittelalter”, in *ibid.*, pp. 269-292.
 - Holbach, R., “Jahrmärkte und Handelsbeziehungen zwischen Weser und Ems im späten Mittelalter”, in *ibid.*, pp. 223-268.

2002年

Dyer, Ch. 2002 a, “Small places with large consequences: the importance of small towns in

- England, 1000-1540", in *Historical Research*, 75, 1-24.
- Dyer, Ch. 2002 b, *Making a living in the middle ages: the people of Britain, 850-1520*, New Haven & London.
- Hybel, N. 2002, "The grain trade in Northern Europe before 1550", in *Economic History Review*, 55-2, pp. 219-247.
- Laughton, J. and Dyer, Ch. 2002, "Seasonal patterns of trade in the later middle ages. Buying and selling at Melton Mowbray, Leicestershire, 1400-1520", in *Nottingham Medieval Studies*, 46, pp. 162-184.
- Lloyd, T. H. 2002, *England and the German Hanse, 1157-1611: A Study of Their Trade and Commercial Diplomacy*, Cambridge UP., Cambridge.
- Masschaele, J. 2002, "The public space of the marketplace in medieval England", in *Speculum*, 77- 2, pp. 383-421.
- Taupenot, L. 2002, *Foires et marchés de Bourgogne au fil des siècles*, Editions de l'Armançon, Précy-sous-Thil.
- Vandewalle, A. 2002, *Les marchands de la Hanse et la banque des Médicis. Bruges, marché d'échanges culturels en Europe*, Stichting Kunstboek, Brugge.

2003年

- Dam, P. J. E. M. van (2003), "Eel Fishing in Holland: The Transition to the Early Modern Economy", in *International Journal of Maritime History*, 15-2, pp. 163-175.
- Gelderblom, O. 2003, "From Antwerp to Amsterdam: the contribution of merchants from the Southern Netherlands to the rise of the Amsterdam market", in *Review. A Journal of the Fernand Braudel Center for the Study of Economies, Historical Systems, and Civilizations*, 26, pp. 247-282.
- Kowaleski, M. (2003), "The Commercialization of the Sea Fisheries in Medieval England and Wales", in *International Journal of Maritime History*, 15-2, pp. 177-231.
- Schmidt, J. -Cl. et Oexle, O. G. (dir.) 2003, *Les tendances actuelles de l'histoire du Moyen Age en France et en Allemagne*, Publications de la Sorbonne, Paris.
- Braunstein, Ph., Bernardi, Ph. et Arnoux M., "Production, travail, consommation", in *ibid.*, pp. 537-554.
 - Fryde, N. et Rothmann, M., "Commentaire: Nouvelles approches dans la recherche en histoire économique allemande", in *ibid.*, pp. 555-560.
- Tranchart, M. 2003, *Le commerce maritime de La Rochelle à la fin du moyen âge*, P. U. Rennes, Rennes.

2004年

- Bibkov, M. 2004, "From commercial communication to commercial integration (Middle Ages to 17th century). Views from/towards Eastern Europe", in M. A. Denzel (ed.), *From commercial communication to commercial integration. Middle Ages to 19th century*, Franz Steiner Verlag, Stuttgart, pp. 13-20.
- Britnell, R. 2004, *Britain and Ireland, 1050-1530. Economy and society*, Oxford U. P., Oxford.
- Davis, J. 2004, "Baking for the common good: a reassessment of the assize of bread in medieval England", in *Economic History Review*, 57- 4, pp. 465-502.
- Gelderblom, O. 2004, "The decline of fairs and merchant guilds in the Low Countries, 1250-1650", in *Jaarboek voor middeleeuwse geschiedenis*, 7, pp. 199-238.
- Petrowiste, J. 2004, *A la foire d'enpoigne. Foires et marchés en Aunis et Saintonge au moyen*

âge vers 1000-vers 1500, CNRS/Université Francophone d'Eté Saintonge-Québec/Univ. Toulouse-Le Mirail, Toulouse.

2005年

- Dyer, Ch. 2005, *An age of transition? Economy and society in England in the later middle ages*, Oxford U.P., Oxford.
- Giles, K. and Dyer, Ch. 2005, *Town and country in the Middle Ages. Contrasts, contacts and interconnections, 1100-1500*, Maney, Leeds.
- Slater, T. R., "Plan characteristics of small boroughs and market settlements: evidence from the middle ages", in *ibid.*, pp. 23-41.
 - Galloway, J. A., "Urban hinterlands in later medieval England", in *ibid.*, pp. 111-130.
 - Albarella, U., "Meat production and consumption in town and country", in *ibid.*, pp. 131-148.
 - Mellor, M., "Making and using pottery in town and country", in *ibid.*, pp. 149-164.
- Lloyd, T. H. 2005, *The English wool trade in the middle ages*, Cambridge U. P., Cambridge.
- Murray, J. M. 2005, *Bruges. Cradle of capitalism, 1280-1390*, Cambridge U. P., Cambridge.
- Sutton, A. F. 2005, *The Mercery of London: trade, goods and people, 1130-1578*, Ashgate, Aldershot.
- Petrowiste, J. 2005a, "Transit et redistribution: l'organisation des échanges marchands dans le comté de Foix à la fin du Moyen Âge (XIIIe-XVe siècles)" in *Circulation des marchandises et réseaux commerciaux dans les Pyrénées, XIIIe-XIXe siècles, Actes du colloque tenu en Andorre en octobre 2003*, CNRS-Méridiennes, Toulouse, t. 2, pp. 415-436.
- Petrowiste, J. 2005b, "Le consul, le comte et le marchand. Commerce et politique en Toulousain au début du XIIIe siècle", in *Annales du Midi, numéro spécial, Dynamiques marchandes: acteurs, réseaux, produits, XIIIe-XIXe siècles*, 117, pp. 291-321.

2006年

- Blondé, B., Stabel, P., Stobart, J. and Van Damme, I. (eds.) 2006, *Buyers and sellers. Retail circuits and practices in medieval and early modern Europe*, Brepols, Turnhout.
- Blonde, B., Stabel, P., Stobart, J. and Van Damme, I., "Retail circuits and practices in medieval and early modern Europe: an introduction", in *ibid.*, pp. 7-29.
 - Stabel, P., "From the market to the shop. Retail and urban space in late medieval Bruges", in *ibid.*, pp. 79-108.
 - Britnell, R., "Markets, shops, inns, taverns and private houses in medieval English trade", in *ibid.*, pp. 109-123.
 - Keene, D., "sites of desire: shops, selds and wardrobes in London and other English cities, 1100-1550", in *ibid.*, pp. 125-153.
 - Harding, V., "Shops, markets and retailers in London's Cheapside, c. 1500-1700", in *ibid.*, pp. 155-170.
- Greif, A. 2006, *Institutions and the path to the modern economy: Lessons from medieval trade*, Cambridge U. P., Cambridge.
- Langton, J. and Massachale, J. 2006, "Commercial activity and population growth in medieval England", in *Past and Present*, 190, pp. 35-81.
- Starkey, D. (2006), *England's Sea Fisheries: The Commercial Sea Fisher*, Greenhill Books, London.

2007年

Armstrong, L., Elbl, I. and M. M. Elbl, (eds.) 2007, *Money, markets and trade in late medieval Europe: Essays in honour of John H. A. Munro*, Brill, Leiden/Boston.

- ・ Masschaele, J., "Toll and trade in medieval England", in *ibid.*, pp. 146-183.
- ・ Aloisio, M., "A test case for regional market integration? The grain trade between Malta and Sicily in the late middle ages", in *ibid.*, pp. 297-309.
- ・ Nicholas, D., "Commercial credit and central place function in thirteenth-century Ypres", in *ibid.*, pp. 310-348.
- ・ Unger, R. W., "Thresholds for market integration in the Low Countries and England in the fifteenth century", in *ibid.*, pp. 349-380.
- ・ Carlin, M., "Shops and shopping in the early thirteenth century: three texts", in *ibid.*, pp. 491-537.
- ・ Masemann, Ch., "Cultivation and consumption: medieval Lubeck's gardens", in *ibid.*, pp. 572-607.

Bell, A. R., Brooks, Ch., & Dryburgh, P. R. (2007), *The English Wool Market, c. 1230-1327*, Cambridge U. P., Cambridge.

Irsigler, F. and Pauly, M. (eds.), (2007), *Messen, Jahrmärkte und Stadtentwicklung in Europa. Foires, marchés annuels et développement urbain en Europe*, Porta Alba, Trier.

- ・ Batlle Gallart, C., "Les foires de la Couronne d'Aragon (XIIe-XVe siècles)", in *ibid.*, pp. 69-82.
- ・ Blockmans, F. et Blockmans, W. P., "Aux origines des foires d'Anvers", in *ibid.*, pp. 161-166.
- ・ Bocchi, F., "Législation urbanistique et réglementation du marché dans les communes italiennes (XIIIe-XIVe siècles)", in *ibid.*, pp. 51-62.
- ・ Chédeville, A., "Foires et marchés en Bretagne, des origines à la Révolution. Leur impact sur l'activité et la structure du milieu urbain", in *ibid.*, pp. 107-126.
- ・ Czacharowski, A., "Jahrmärkte und Messen im mittelalterlichen Polen", in *ibid.*, pp. 235-241.
- ・ Guidoni, E., "Les foires à Rome et dans sa région à partir du Moyen Âge jusqu'au XIXe siècle", in *ibid.*, pp. 63-68.
- ・ Hietala, M. and Lilja, S., "Markets and Urbanization in Finland and Sweden prior to 1800", in *ibid.*, pp. 177-206.
- ・ Irsigler, F., "Messen, Jahrmärkte und Stadtentwicklung in Europa: Mittelalter und frühe Neuzeit", in *ibid.*, pp. 1-24.
- ・ Irsigler, F. et Reichert, W., "Les foires de Champagne", in *ibid.*, pp. 89-105.
- ・ Kubinyi, A., "Die Märkte Ungarns im Spätmittelalter", in *ibid.*, pp. 253-262.
- ・ Ladero Quesada, M. Á., "Les foires de Castille (XIIe-XVe siècles)", in *ibid.*, pp. 83-88.
- ・ Niedermaier, P., "Jahrmärkte eines Übergangsraumes: Rumänien im Mittelalter", in *ibid.*, pp. 263-284.
- ・ Pauly, M., "Jahrmärkte in Europa vom 14. bis zum 16. Jahrhundert: Regionale Untersuchungen und der Versuch einer Typologie", in *ibid.*, pp. 25-40.
- ・ Pauly, M., "Der Beitrag der Messen und Märkte zur mittelalterlichen Integration Europas", in *ibid.*, pp. 285-314.
- ・ Riis, T., "Foires, marchés annuels et développement urbain au Danemark jusqu'au milieu du XVIIe siècle", in *ibid.*, pp. 207-234.
- ・ Simms, A., "The Origin of Fairs and Markets in Medieval Ireland a. d. 1000-a. d. 1600", in *ibid.*, pp. 161-176.

(その他に、ビザンツ、近世史関係の数点も所収)

2008年

Dodd, R. and Britnell, R. H. (eds.), *Agriculture and Rural Society After the Black Death: Common Themes and Regional Variations*, Hatfield.

- Britnell, R. H., "Market and incentives: Common themes and regional variations", in *ibid.*, pp. 3-19.
- Britnell, R. H., "English agricultural output and prices, 1350-1450: national trends and regional divergences", in *ibid.*, pp. 20-39.
- Gemmill, E., "Town and region: the corn market in Aberdeen, c. 1398-c. 1468", in *ibid.*, pp. 56-70.
- Schofield, Ph., "Regional prices differentials and local economies in north-east England, c. 1350-c. 1520", in *ibid.*, pp. 40-55.

2009年

Britnell, R. 2009, *Markets, trade and economic development in England and Europe, 1050-1550*, Ashgate, Farnham (UK)/Burlington (USA).

Epstein, S. R. 2009, *An economic and social history of late medieval Europe, 1000-1500*, Cambridge U. P., Cambridge.

Lombard-Jourdan, A. 2009, *Les Halles de Paris et leurs quartiers (1137-1969)*, Ecole Nationale des Chartes, Paris.

Petrowiste, J. 2009, "Un bourg marchand exemplaire ? L'activité économique à Saint-Sever d'après le tarif du péage du XIIIe siècle", in B. Cursente (dir.), *Abbaye de Saint-Sever. Nouvelles approches documentaires (988-1359)*, Actes du colloque tenu à Saint-Sever en septembre 2008, Société de Borda, Dax, pp. 225-249.

Theiller, I. 2009, "Prix du marché, marche du grain et crédit au début du XIIIe siècle : autour d'un dossier rouennais", in *Le Moyen Age*, 115, pp. 253-276.

Van Doosselaere, Q. 2009, *Commercial agreement and social dynamics in medieval Genoa*, Cambridge U. P., Cambridge.

2010年

Arnoux M. et Flambard Hericher A. -M. (dir) 2010, *La Normandie dans l'économie européenne (XIIe-XVIIe siècles). Actes du colloque de Cerisy-la-Salle, 4-8 Octobre 2006*, Publication du CRAHM, Caen.

- Theiller, I., "Les marchés hebdomadaires à la fin du moyen âge: le cas normand", in *ibid.*, pp. 39-49.
- Angers, D., "Le bourg de Tilly-sur-Seulles, ses foires et marchés (1381)", in *ibid.*, pp. 51-63.
- Jean-Marie, L., "Les villes de Normandie occidentale dans l'économie normande et européenne (XIIe-début XIVe siècle)", in *ibid.*, pp. 81-98.

Davis, J. 2010, "Marketing secondhand goods in late medieval England", in *Journal of Historical Research in Marketing*, 2-2, pp. 270-286.

Howell, M. C. 2010, *Commerce before capitalism in Europe, 1300-1600*, Cambridge U. P., Cambridge.

Kawaleski, M. 2010, "The seasonality of fishing in medieval Britain", in S. G. Bruce (ed.), *Ecologies and economies in medieval and early modern Europe. Studies in environmental history for Richard Hoffman*, Brill, Leiden, pp. 117-147.

Lecuppre-Desjardin, E. and Van Bruaene A. -L. (eds.) 2010, *De Bono Communi. The Discourse*

and Practice of the Common Good in the European City (13th-16th c.). Discours et pratique du Bien Commun dans les villes d'Europe (XIIIe au XVIe siècle), Brepols, Turnhout (Studies in European Urban History, 1100-1800, no 22).

Theiller, I. 2010, "La création des marchés hebdomadaires. Quatre documents normands des XIVe-XVe siècles", in *Histoire et société rurale*, 24, pp. 105-121.

Van Babel, B. 2010, *Manors and markets. Economy and society in the Low Countries, 500-1600*, Oxford U. P., Oxford/New York.

2011年

Ammannati, F. (ed.) 2011, *Dove va la storia economica? Metodi e prospettive. Secc. XIII-XVIII. Where is economic history going? Methods and prospects from the 13th to the 18th centuries*, Firenze University Press, Firenze.

Amor, N. R. 2011, *Late medieval Ipswich. Trade and industry*, Boydell, Woodbridge.

Dijkman, J. 2011, *Shaping medieval markets. The organization of commodity markets in Holland, c. 1200-c. 1450*, Brill, Leiden/Boston.

Dodds, B. and Ch. D. Liddy (eds.) 2011, *Commercial activity, markets and entrepreneurs in the middle ages. Essays in honour of Richard Britnell*, Boydell, Woodbridge.

Grohmann, A. 2011, *Fiere e mercati nell'Europa occidentale*, Mondadori Bruno, Roma.

2012年

Bailey, M. and Rigby, S. (eds.) 2012, *Town and countryside in the Age of the Black Death: Essays in Honour of John Hatcher*, Brepols, Turnhout.

· Britnell, R. H., "The coal industry in the later middle ages: The bishop of Durham's estates", in *ibid.*, pp. 439-472.

· Davis, J., "Selling food and drink in the aftermath of the Black Death", in *ibid.*, pp. 351-409.

· Lee, J. S., "The role of fairs in late medieval England", in *ibid.*, pp. 407-437.

Davis, D. 2012, *Medieval market morality. Life, law and ethics in the English marketplaces, 1200-1500*, Cambridge U. P., Cambridge.

Milton, G. B. 2012, *Market power. Lordship, society, and economy in medieval Catalonia (1276-1313)*, Palgrave Macmillan, New York.

Sarrazan, J. -L., "Anastomoses. Les connections économiques à la fin du Moyen Age", in Gilli, P. et Paviot, J. (dir.), *Hommes, cultures et sociétés à la fin du moyen âge. Liber discipulorum en l'honneur de Philippe Contamine*, P. U. Paris-Sorbonne, Paris, pp. 391-408.

Scott, T. 2012, *The city-state in Europe, 1000-1600. Hinterland-territory-region*, Oxford U. P., Oxford/New York.